

口鼻目眉の喧嘩

あるとき口が不平を訴えて「俺は毎日食べ物を嚙んで身を養っている。こんな大役を果しているのに、鼻はなんだ、ろくな仕事もせず、俺より一段高いところにある。怪しからん」と言い出した。すると鼻もやり返す。「俺は匂いを嗅ぐのが役目だ。みなかぎ分けるから、お前に怪我がないのだ。もし俺がいなかったら、お前がどんなものを食うか解らないぞ。大きなことを言うな」とやり込めて上を見れば、目の奴が二つ構えている。それが気になってならない。「目の奴め、何もしないで、贅沢にも戸を閉めて眠ってる」と罵れば「俺は俺で立派な仕事をしている。俺がいないと東も西も解らんぞ。柱の角にぶつかって鼻を挫かないのは、俺がいるからだ。上にいるのも無理はない」と威張って、ちよつと上を見ると眉毛が寝そべっている。これが癩に触わる。「眉は何だ、何もしておらん。はなはだ無礼な奴だ」と言われて「なるほど、私は別に、働きとてない、流れる汗をせき止めるくらいのこと。申し訳ない、それではお前の下に行こう」と眉が目の下に引っ越した。ところがそこに落ち着いては、一向に人の顔の形をなさなくなつた。実は眉が顔体の配置を締めくくっていられたのだ。

阿弥陀経に曰く「青色青光黄色黄光」みんなちがってみんないい。

